
君と僕と此の部屋はまるでありふれた

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と僕と此の部屋はあるでありふれた

【ZZード】

N2273P

【作者名】

千葉

【あらすじ】

さよなら平凡、ありがとひ平凡

「おはよう。」

船の声が聞こえる。

「おはよう。」

ああ、せめて何をしたくて此処に醒ただっけ？

「おはよう。」

澄んだ君の声から始まる朝。

これじや、まるでありますふれた、

覚醒した意識。薄っすりと眼を開ける。

途端飛び込んできたのは、眩し過ぎるビビの太陽の光だった。

いつの間に眠ってしまったんだろう。

横たわっていた黒い革張りのソファから、ゆっくりと身体を起し出す。

ソファは窓の方を向いて置かれていた。おかげで眩しくてたまらない。

不自然なこの配置は確か、君が窓から見える風景が好きだと呟つたから。

だからぼくは、テーブルとは少し離れたここへ、ソファを移動してあげたんだった。

「おはよつ。」

君の声が聞こえて、ぼくは背後に田を向けた。
ぼくの後ろで、君はにこやかに笑っていた。
それにつられて、ぼくも笑う。

ぼくの意識は徐々に夢から醒めていった。
現実の記憶をゆっくりと手繰り寄せ、眠る前の記憶に辿り着く。

それは、ぼくらひとつて少し、酷な記憶。

「みんなは？」

ぼくの問いに、君の笑みが少し悲しげな色を帯びた。
それが、ぼくを完全に夢から引きずり出した。

「みんなは、行ってしまったよ。」

君はささやき声でと変わらない声音で答えた。

そうすると、笑顔も再び普段のものになつた。
悲しみの色は、どこかに隠れてしまつた。

「みんな、行つてしまつたよ。だから、」

君の言葉の続きを待つて、ぼくは君の笑みを見つめた。
すると君は、一際笑みを明るいものにしたのだ。

「だから、朝ご飯を食べようか。」

そつ言つと君は、踵を返して部屋から出て行つてしまつた。
ぼくは少し呆然として、その後姿を眺めていた。

君は何故、そんな顔で笑うことができるのだろ？
この朝は、いつもと違う現実だとこうのに。

いつそぼくに縋つて泣いてくれれば良かつた。
劇的にいつもとは違う行為を君が行つてくれれば、ぼくはこれを心
から現実と受け止められたのに。

現実を無視して君が笑つたから、
ただいつもと同じように笑つたから、
これじや、ただ眩しそぎるこの朝も、
息をする者の減つてしまつたこの部屋も、まるでありふれた、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2273p/>

君と僕と此の部屋はまるでありふれた

2010年11月30日07時53分発行